3　大阪病院の人体模型――高橋正純訳『紙塑人体解剖譜』と大江伊兵衛の木製人体模型――

月澤　美代子
順天堂大学医学部医史学研究室

国会図書館に、高橋正純訳、岡澤貞一郎校『紙塑人体解剖譜』（明治十年、大阪病院刊）という冊子が残されている。この冒頭の「例言」によれば、高橋正純が旧大阪医学校に在籍していた時、「教師越爾蔑嗹斯氏に謀て仏文解剖譜を蘭文に訳」し、さらに、邦文に訳してしまっておいたものを、「今茲我院約する所の紙塑人体新に仏國より来る」時を迎え、岡澤貞一郎に託して校正させたという。

高橋正純が訳した「仏文解剖譜」とは、その内容からオズー一八五七カタログ掲載の Modèle d'homme COMPLET, de 1m.80cent. の「符号表」である "Tableau synoptique de l'homme clastique complet, 1857" と確認できた。なお、解剖学上の訳名は、松村矩明、安藤正胤他訳『解剖訓蒙』明治五年大坂医学校官板を踏襲して付けられ、ラテン語学名が下に付けられている。

ポンペ、ボードウィン、マンスフェルトら幕末から明治初頭に長崎で医学教育にあたった蘭人医師たちは、人体解剖実習に使用できる屍体が極めて少ない状況下にあって、長崎方式とでもいうべき解剖学教育を日本に導入した。すなわち、オズー製作のフランス製人体模型を援用してのオランダ語による解剖学講義、解剖のための屍体が入手できた時は学生自らが参加する人体解剖実習というやり方である。

明治二（一八六九）年二月に創設された大阪仮病院には、長崎医学校から蘭医ボードウィンが招かれた。ボードウィンは午前中は診療、午後は講義を行い、病院及び伝習御用掛の緒方惟準が、フレスの解剖書の講義を行った。ボードウィンの退任後も、エルメレンス、マンスフェルトと、オランダ人医師が診療と医学教育にあたってきた。また、緒方惟準、高橋正純をはじめ中心となって働いてきた日本人医師たちは長崎でオラ

ンダ医学を学んだ。解剖学教育も、明治十年時点でなおオズーの人体解剖模型を援用する長崎方式が継承されていたと考えられる。

この『紙塑人体解剖譜』は、明治十年七月一九日御届、明治十年十月二五日刊行となっており、これを信ずるかぎり、明治十（一八七七）年七月には、大阪病院にオズー作の紙塑人体模型が既に存在していたことになる。しかし、現在、その所在は確認されていない。

一方、明治十年八月十日付け『大阪日報』には、大阪の「有名なる人形師」大江伊兵衛が、「紙塑人体「キンストレイキ」を悉皆木にて彫刻」し、「この節その概略を製し、病院に点検に出せしが、五臓六腑その他筋骨等に至る迄、実に原体紙塑の通りにて、さすが、伊兵衛の妙工と云うに愧かしからず出来上がりし由」と報じられている。結局、この人体模型は明治十年の第一回内国博覧会に出品されることはなく、紙面の表現ほどには見事な出来ではなかったことと推測されるが、大阪病院にやってきた紙塑人体模型は医学関係者のみならず大阪の町の話題を呼んでいたことと思われる。

なお、この紙塑人体模型の購入ルートに関して、駐仏公使であった鮫島尚信の『在欧外交書簡録』（鮫島文書研究会編、二〇〇二、思文閣出版）が大きな示唆を与えている。明治十年五月一日付の書簡において、鮫島はオズーに発注していた全身人体解剖模型二体の引き渡し可能日と価格を問い合わせている。この人体模型は、同年五月三〇日には、まだ届いておらず、いつ実際に日本にもたらされたのかは不明だが、六月から七月初めに日本に舶載され大阪病院に届けられた可能性は大きい。

（本報告は、平成一八年度科学研究費補助金（課題番号 18500763）による研究の一部である。）